

内閣府青年国際交流事業既参加青年調査

- (1) 名前：Panagiotis Mamouzakis（パナヨティス マムザキス）
（ギリシャ共和国）
- (2) 年齢：40 歳
- (3) 参加事業：
 - 1) 第 22 回「世界青年の船」事業 参加青年（2009 年度）
 - 2) 第 31 回「世界青年の船」事業 ナショナル・リーダー
（2018 年度）
 - 3) 東南アジア青年の船未来会議ファシリテーター（2020 年度）
 - 4) SWYWAVE ストーリーテリング登壇（2020 年度）
- (4) 職業：Roes Cooperativa（体験学習におけるイノベーションを扱った社会事業会社）共同設立者・プレジデント



■ 参加のきっかけ

「世界青年の船」事業（以下「世界船」という。）の経験は、**私の人生を変えるもの**でした。人生に迷い、大学に失望し、仕事を転々していた私は、ギリシャ青年に門戸が開かれていた世界船に出会いました。私は親に言われるがままに大学に行き、卒業後は会社に勤め、平日の 9 時から 17 時まで「生活のために働く」ことをしていました。一方で、週末は、長年続けているボーイスカウト活動のボランティアリーダーとして、楽しく活動していました。ボーイスカウトはギリシャで最大の青少年団体であり、日本国大使館の選考において世界船の参加青年推薦枠が設けられていました。当時 28、29 歳でしたが、告知を見てすぐに応募書類を記入し始めました。このプログラムは私が求めていたものだ、そう思いました。後述する第 31 回に比べると、第 22 回は青少年団体経由ということで、当時はまだ誰もが知りうる事業ではありませんでした。応募者数は分かりませんが、100 名から 200 名の範囲ではないでしょうか。私は現在、青少年活動を企画する側にいますが、海外に行くようなプログラムで応募数が 100 名というのは、極めて少ないです。第 22 回はまだ限定的な状況でした。

■ 世界船独特の「異文化コミュニケーション」と「学習環境」

世界船への参加が決まった時は、異国情緒あふれる素敵な旅になるだろう、くらいの気持ちでしたが、**単なる「旅」ではなく、私の「人生の旅」になることには、ほとんど気づいていませんでした。**正直なところ、参加青年として参加したときは、何がどのように有益だったのか自分の経験に落とし込めず、世界船が私のキャリアパスに変革をもたらすような影響に気付くまで、少なくとも 1 年はかかったと思います。今振り返ってみると、「**異文化コミュニケーション**」スキルと「**学習環境**（世界から切り離された 300 人との共同生活）」が、私の進路に最も大きな影響を与えたと言えるでしょう。

まず異文化コミュニケーションでは、自分がギリシャ国民というより、**地球市民としての自覚**を持つことができました。自分の視野を広げ、他の文化により興味を持つことができました。そうすることにより、私は自国の文化をよりよく知り、国際協力に対する限界についても理解することができました。私はこれまでヨーロッパ域内の多くの国々を旅して、人々にも文化にも触れていましたので、既に知ったつもりになっていました。しかし日本に到着し、他の国々の参加青年にも会う中で、**人生は多面的であり、歴史、地理、文明など、もっと学ぶことがある**と知ったのです。また、学習環境ですが、食事

や宿泊など基本的ニーズを提供する大きな箱の中で起きることが全て、学びになりました。このことを参加青年として参加した第 22 回で理解していたので、ナショナル・リーダーとして再度参加したプログラム中では、「どうかこのまま航海を続けさせてほしい、寄港地活動もしたい、でも日本には戻らないでほしい（終わりを迎えたくない）」と考えていたものです。

世界船の「**他国の人と一緒に日常を過ごすということからの学びの強烈さ**」はあまり認知されていないかもしれません。世界船は、学習環境がどのように機能し、どのように作られ、どのように人々の個人的・職業的成長の支援に活用できるかを探求する動機になりました。つまり、基本的に私のキャリアを形作るものとなりました。私は現在の仕事において、このコンセプトを用い、人里離れた場所でプログラムを実施することがあります。「日中の活動が終了したら、それぞれコンビニに行ったり公園に行ったりする」というのでは意味がなく、活動外でも一緒に過ごしてもらおうのです。



2015 年、オランダでの滞在型交流プログラムで、青年たちと（筆者中央左）

隔離するということは、スマートフォンなどのテクノロジーも使えなくなりますね。

最近のプログラムでは、**テクノロジーから切り離す**ことをしています。参加者のスマートフォンや PC を箱に入れてもらい、鍵をかけるセレモニーを行い、テクノロジーに頼らない生活の経験をしてもらうことがあります。デジタル・ネイティブの青年たちがスマホを手放すということは、大きなインパクトを与えます。テクノロジー利用が悪いというわけではなく、**テクノロジーをサステナブルに活用**することが目的です。例えば 9 日間のプログラムで、2 日目の夕方に、テクノロジーと断絶する儀式をやるのですが、1 日目はその準備をします。「明日の夕方から、電子機器も電波も使えなくなります。テクノロジーへの感謝のメッセージを伝えましょう」と話し合います。そして機器を箱に入れる儀式の後には、「自分の愛する人に、手書きで手紙を書きましょう」とします。「今スマホが手元になくて、どんな気持ち？」ということも話し合います。テクノロジーは生活に入り込んでいますし、もうすぐメタバース（仮想空間）が登場しますから、「テクノロジーをどう活用するか」に加えて、「自分たちが何者で、どこにいて、誰とつながるか」というのがこれまで以上に大きな問題となってきます。世界船の環境下では、テクノロジーから切り離すことができますが、寄港地で港に着いた途端に人々が Wi-Fi に群がることも、避けられないでしょう。テクノロジーの活用については、世界船での異文化理解の導入セッションと同じように、「どうテクノロジーを使うか、どのくらい中毒になっているか」を考える導入セッションをしてもいいのかもしれない。

■プログラムが終わってからこそが、世界船の始まり

私は今日、欧州レベルの学習プログラムに多く携わっていますが、やはり世界船で最も影響力があるのは、以下の2つの要素だと言えるでしょう。一つに、**参加者の文化、経験の多様性**。青年の日常生活における行動から文化に触れることは、貴重な経験です。そして二つ目は、青年が守られており、閉鎖的な空間で、安全な環境にいられること。食事や寝床の心配をする必要がなく、基本的なニーズがすべて満たされており、**世界平和がどのように作られるかを示す素晴らしい例**だと考えます。世界船に参加した後、自分のキャリアパスに影響を与えたスキルを、私は多く確認しています。しかし、ここで重要なのは、**プログラム期間中にそれらを全て学んだわけではなく、参加後の私の人生に、直接的に影響を与えた**ということです。だから私はみんなに、「**世界船を降りた後、自分のビジョンを実現するために社会に出てからが世界船の始まりだ**」と言い続けているのです。関連して、第31回でギリシャ青年を選考した時のことなのですが、応募者に質問票を回答してもらい、この事業を「バケーション（休暇）」「クルーズ旅行」と考えている人は除外しました。そして、事業名に「リーダーズ」と入った回もあるくらいですから、リーダーの育成を目的としており、**現在リーダーとして活躍していなくても、その可能性がある人に参加してほしい**と思いました。ですから、世界船の参加をフルに生かし、**自分で自分のリーダーシップを発揮できるかという、事後のポテンシャルを重視**しました。

年月を経ないと分からない成果の難しさもありますね。

私自身も事業実施者として最終日に参加者にアンケートを取って、「このプログラムはどうでしたか」と聞きますが、**本当の価値は事業後に見えてくるもの**なのです。例えばギリシャは第2回の世界船に参加していますが、現在この2回生は大変アクティブです。インターネットが普及して連絡が取れるようになってから、本当に家族のように集まったりしています。ですから、事業の長期的なインパクトというのは、この2回生を見ているとよく分かります。なので、一つのアイデアとしては、参加後1年、2年経った青年たちに、メールのアンケートを送り、「世界船がどうだったか、どのように役立ったか」を聞くのです。事業直後は「どんな瞬間にインパクトがあったか」と聞きますが、**年数を経て「どんなことが自分に定着したか」を振り返ってもらう**のです。世界船のような非公式学習や体験学習の環境下では、**数字に表れる結果だけを見ては、本来の価値が測れない**ことがあります。もちろん「見える成果」として大臣になった人を取り上げることも大切ですが、家族を持って、家庭内に異文化コミュニケーションの大切さを教えていることも、重要だからです。

■世界船の規模とインパクトは最大

世界船ほどインパクトがある事業はあるか？と聞かれると、大変難しい質問です。世界船を知らない人に、私は「**この地球で最大の青年交流**（the biggest youth exchange in the planet）」と説明しています。規模といい、日常からの逸脱加減といい、破格だからです。実際に私は「ミニ世界船」のようなプログラムを実施していますが、それでも世界船とは比べることができません。今日、世界の若者は多くの国際交流事業に参加する機会もあります。例えば、欧州連合などは、7年ごとに予算を提供し、青少年団体主催の交流プログラムができるようにしています。「エラスムス・プログラム」では、ヨーロッパの様々な国の青年を一つの国に集めて7-10日間30-50人で一つのトピックを扱う、拠点滞在型の交流プログラムを実施します。例えばギリシャでNGOエコセンターでの環境系プログラムをする時には、自然の多い所へ出向いて、8カ国から5人ずつ招待されて計40名で「芸術」のテーマを扱います。ギリシャでは100のプログラムが実施されており、私がユースワーカーとしての基盤を作ったオランダのNGOでは「エラスムス・プラス」という枠組みで、インクルージョン（包括）、持続可能な開発、デジタル技術の持続可能な利用などを扱ったプログラムを実施しています。参加者は複数のプログラムに参加ができるようになっていきますので、このような滞在型プログラムが世界船に一番近いと考えられ、規模は世界船の比ではないにしても、欧州の青年たちに対して門戸が開かれています。

■ 世界船から学んだ具体的なスキル

私が世界船の効果だと直接的に感じている技能や姿勢は、以下の通りです。

- 異文化対応力。異文化に対してオープンであること
- ネットワーキング力。異なる背景を持つ人々とつながり、ネットワークを作ることができること
- ダイバーシティ&インクルージョン・スキル。地球市民であること、そして世界は異なる文化、経験、機会、スキルの組み合わせであり、自らもその一員であると実感すること。
- 内省力。自己理解、自分の原動力、自分のニーズ、自分の願望について理解できる。

■ 日本の印象

世界船参加前は、私にとってエキゾチックな遠い国という印象でした。参加後の今は、「**自分を探求する機会を与えてくださったことに、永遠の感謝の気持ち**」があります。日本、日本文化、日本の人々、歴史など、私とは全く異なる文化ではありますが、私は常に日本とのつながりを感じています。

■ 船事業での偶発的な学び

船内活動で有益だったのは、**インフォーマル・ラーニング（カジュアルな場での偶発的な学び）**です。船内の活動をきっかけとし、参加青年の相互作用により学習の場が生まれています。青年たちは、公式なプログラム、寄港地活動、各種文化活動に取り組み、それらは素晴らしいものです。さらに素晴らしいのは、**これらプログラムが、あらゆる側面で参加者の間での議論や討論、文化交流の話題となること**です。例えばジェンダー平等について、船内で何かが起きたとすると、「私はこう思う」「私に取っては変な感じがする」「ギリシャではこうだよ」「オーストラリアではどう？日本では？」など、何でも話題にするのです。これらがランダムで、しかも詳細に満ちていることに価値があります。

出来事を学びに変えるプロセスも、重要となりますね。

このような場での**ファシリテーターやナショナル・リーダーの貢献**は、さらに重要です。公式プログラム以外でも、公式プログラムの中でも、若い参加青年が交流し、意見を交換し、責任を理解しながら、イベントの企画、活動、行動できるよう、力を与え、指導し、動機づける（あるいはすべき）立場だからです。先ほどとは別の例で、フェイク・ニュースについて考えたこともありました。船内で、「船の後方で、サメとイルカが一緒に泳いでいますよ」とアナウンスがあった時、信じてそのまま友だちに伝えてしまう人もいます。それが嘘だと知っている人もいます。第22回でも、小さな噂がとてつもなく大きくなってしまったことがありました。これを、当時のアドバイザーがよく状況を見定め、「皆さん、オーバーに反応しないで。**まず自分の頭で考えて、それから行動して**」と私たちにアドバイスをくれました。ファシリテーターが重要と考えるのは、参加青年とナショナル・リーダーは、どちらも「学習者」という立場で同じだからです。ファシリテーターはその学習をホールドする役割なので、「今この質問をしたらいいだろう」というようなコーチング・スキル、メンタリング・スキルが必要です。

ナショナル・リーダーには、どんな役割がありましたか。

ナショナル・リーダーは、私がそうだったように、参加青年としての経験を経て、参加青年の学びがどう最大化するかをサポートする役割があります。海外に行ったことがない青年にとっては、日本という国に着いてこんなにたくさんの高層ビルが立ち並び、道路も立体的に交差していて、思考が止まってしまいます。ナショナル・リーダーはそこで、「ここから何を学べるか、どう活用できるか考えよう」と投げかけるのです。例えば日本が漫画で有名な国、くらいの認識から、そうではない現実に深

く入っていきますので、青年を学びのプロセスへと誘導するわけです。そして、第 31 回の時には「どうやって世界船から現実世界に戻るか」というセッションを企画しました。自分が参加青年だった時に少し時間がかかりましたし、事業の終わりが、まさにこれからの始まりとも言えるからです。

■ 寄港地活動で受けた歓待への感謝

寄港地活動で印象に残ったものを選びにくいのですが、私にとっては、第 22 回でチェンナイとドバイという 2 つの寄港地を体験することで感じた学びが最も大きかったです。第 22 回で最初にシンガポールで給油した時も、世界にこんな場所があるのかと驚きました。数週間前にトランジットでシンガポール空港にいた時も、当時の記憶が蘇ってきて、場所と人の記憶はこのように結びついていると実感しました。ホスト国のホスピタリティが溢れ、**人間はどんな生活環境でも、どんな開発環境でも変わらない**ということを強く実感しました。インドのチェンナイで、ラジブ・ガンディー青少年施設を訪ねた際、何十人もの若者が列になって私たちを迎え入れて下さいました。港に着いた時は、多くのテレビカメラが私たちを撮影していました。またドバイでも同じように、砂漠で歓迎を受け、船でも皇太子表敬が行われた記憶があります。私はギリシャのどこにでもいる一青年でしたが、この事業に参加したことで、各地での**歓迎の気持ち**を受け取りました。文化を知ろうとする青年と、歓迎してくれる青年たちが、出会うのです。一観光客では、このような歓待は受けません。第 31 回では寄港地活動に加えて、給油地であったソロモン諸島でも既参加青年が迎えてくれ、青年省大臣が私たちにギフトをくださり、手厚く歓迎して下さいました。自由時間に市場へ行ったり、海で泳いだりと楽しい記憶が残りました。その結果、**人間は様々な状況下で機能し、インクルーシブな世界に向かって願望、価値、夢、希望を持ち続けることができる**と理解でき、私の考え方は大きく広がりました。世界各地から集まった様々な若者が、日常的な苦勞のない安全な環境（基本的なニーズがすべて満たされている）で出会い、同時にこの環境が、外の世界で起こっている苦しみや日々のニュースから切り離されているという事実は、誰にとっても素晴らしい学びの機会をもたらしてくれます。そして、私はノンフォーマル・ラーニング（体験学習）の専門家と言えるのは、**世界船の最高の学習環境を超えるものは、宇宙船くらいしかありません。**

■ 青少年育成に関わる事後活動

私はボーイスカウトでのボランティア活動歴が長く、「ああいうリーダーになりたいな」というリーダーを見て育ってきました。結果的に、私は「社会的によいとされている仕事」ではなく、「私が大好きと思える活動（趣味）」を仕事にすることができました。私は、ノンフォーマル・ラーニング（体験学習）の分野で社会起業家として活動しており、「Roes Cooperativa」という体験学習の革新を目指す社会事業会社の共同設立者兼会長を務めています。また、環境、伝統、文化、自己啓発を柱とした環境教育センターである「Hopeland NGO」の理事を務めています。ギリシャの青少年及びユースワーカーの支援を目的とした、ギリシャの「全国ユースワーカー協会」の創立メンバーです。第 22 回世界船のすぐ後でしたが、これは非営利（ボランティアベース）の職業団体で、2 年以上青少年分野で仕事に従事している人を個人会員として募り、ユースワーカーの社会的地位向上、活動環境の向上のための活動をしています。ギリシャでは、青年省でも英語の「ユースワーク」がそのまま使われているくらいなので、青少年のための活動が概念として定着しづらいという課題があります。そこで、ギリシャの各地で活動しているユースワーカー 55 名が集まり、弁護士にも相談し規約を作り、団体を設立しました。大きな進歩はないかもしれませんが、法の整備などで、少しずつ声を上げています。また、欧州レベルでは、ユースワークの価値向上、活動の保護を目的とした「国際ユースワーク・トレーナーズ組合」の会員です。



役員を務める「Hopeland NGO」で、宿泊型の自然体験プログラム
太陽光発電以外、電気を使わない生活をする（筆者左から2人目）

どのような経緯で、起業を志したのでしょうか。

第22回世界船に参加後、私はノンフォーマル・ラーニング（体験学習）のファシリテーター／プロジェクト・マネージャーになろうと決意しました。また、世界船の参加に影響され、ヨーロッパの若者のために、小規模にはなるものの**滞在型の国際青年交流事業（「ミニ世界船」）を再現できる専門家になりたい**と思うようになりました。私は欧州委員会の助成金に応募し、ヨーロッパ各地の若者（100人以上）に対して学習の機会を提供することができました。その一方で、私は社会起業について学び、トレーニングを提供できる講師の資格を取得しました。社会起業に関する知識を得た後、2017年に「Hopeland NGO」に加わり、理事に就任し、積極的に関わりました。第31回世界船が終了し、2019年に、私は専業で社会起業家として活動することを決め、私の情熱であるファシリテーション・トレーニングと社会起業を組み合わせた事業会社を共同設立しました。2020年初頭より、私は「Roes Cooperativa」を通じて、革新的な体験学習トレーニングの機会を提供し、人々の個人的な成長と専門的な開発をサポートしています。素晴らしいことに、共同設立した7人のうち私を含む3人が世界船同期のアシスタントナショナルリーダーです。

事後活動組織としては、どんな活動をしていますか。

ギリシャでの世界青年の船事後活動組織の役員を、第22回参加直後から務めています。また、会長として4年務めました。パンデミック以前の主な活動としては、「SWYAA Radio」という企画で、オンラインのラジオ番組に世界中の既参加青年が登場し、話すというものを継続して行っていました。また、日本国大使館での文化紹介イベントには必ずお声がけをいただき、日本文化普及のサポートをしています。回生ごとに、例えば先ほどの第2回の既参加青年たちは、リユニオンでギリシャ国内で集まったり、インドまで行ったりと、大変盛り上がっています。事後活動組織国際大会があると、その前にギリシャ国内のリユニオンとして集まったりすることもあります。そのほかにも、ギリシャ国外の既参加青年がギリシャを訪問した際には会食をしたりしています。公式な活動だけでなく、こういった非公式な活動も多くあります。既参加青年同士が知り合ってビジネスに繋がったり、既参加青年同士が結婚して家庭を持ち、その子どもが世界船に乗ることもあります。

(第31回では、第2回に出会ったギリシャ青年とエジプト青年の息子が参加青年にいました)。一番盛り上がるのは、ギリシャが世界船に招へいされる時です。もちろん参加できるかどうか私たちは決められないものの、特に第22回の後9年越しで第31回に招へいと決定した時、「ギリシャで最高の青年たちに参加してもらおう！ 私たちも次世代を取り込んでいこう！」と盛り上がりました。



ペルーの事後活動組織を訪ねた際、第27回参加青年の事前研修で
地元の学校を訪ね生徒らと交流（筆者右先頭）

■ 職業的ネットワークのほとんどは世界船によるもの

現在、私が持っている国際的な個人的・職業的ネットワークは、ほとんどが**世界船から直接的・間接的に得たもの**です。第22回世界船参加後、ギリシャの既参加青年から、オランダの学習機関でノンフォーマル教育のキャリアを積むことを勧められました。個人レベルでは、既参加青年を訪ねて12か国を旅し、私の自宅にも21人以上の既参加青年が遊びに来てくれました。世界青年の船事後活動組織国際大会（グローバル・アセンブリー）や非公式な世界船のミーティングにも参加し、ギリシャ事後活動組織においても積極的に活動しています。仕事においては、日常的に2名の既参加青年と仕事をしています。将来的には、日本青年国際交流機構（IYEO）と共に、欧州の助成金を活用したプログラムを立ち上げ、欧州と日本の体験学習から得た知識を共有する予定です。

パナヨティス・マムザキス氏のプロフィール

社会事業会社「Roes Cooperativa」共同設立者兼プレジデント。第 22 回「世界青年の船」参加後、ノンフォーマル・ラーニング（体験学習）の可能性に気づき、青少年育成の道に進む。オランダの機関で経験を積み、指導者としての資格を取得。青少年を対象とした各種プログラムを展開している。ギリシャの世界青年の船事後活動組織の会長経験者で、現在は役員として参画。